

「シャンソンを忘れている」というタイトルの文を以前に書いたことがあるが、またしても「シャンソン・フランセーズを忘れている」と来ましたね、突然、電話が。実は私はこのところまた「フランス語聞きたくないなあ」という状況で、イタリア語のクラシックばかり聴いていたのだが、思いがけずシャンソン・フランセーズのグループの親睦飲み会の現場から電話が入って数人と話をした。いつもシャンソン・フランセーズから離れそうになると、こんな風に何らかの形で歌が私に近づいてくる。でも彼らと話ができて嬉しくて、そのあとの夕食で思わずイタリアのワインの栓を抜いた。(白ワインはイタリア、赤ワインはカリフォルニアが私の定番)

さて、その会話の中に出てきた「ラ・ジャヴァネーズ」「ん?どこかで聞いたことがあるが、誰の歌だったかなあ?」とボ〜っと漠然と調べたところセルジュ・ゲンズブールの歌だった。というわけでその夜、シャンソン・フランセーズを忘れていた私の目の前でフランス語の歌詞が歴然とほほえんだ。しかし、久しぶりの歌の再来がどうしてセルジュ・ゲンズブールなのだ?と私は彼の詩と向き合っと思った。何故なら彼の感受性の強い詩はよ〜く考えないと誤訳の危険性が高い。複雑な言い回しの中に隠された感性を誤解なく受け止めるには、不真面目を装う真面目を受け取るには、やはりじっくり言葉を味わわなければならない。そこで私はまた歌に集中する。それはシャンソン・フランセーズの深い懐に呼びこまれることとなり「フランス語聞きたくないなあ」から戻ってくるのに最大の効果を発揮した。こんなアンテナに触れるきっかけがないと、「聞きたくないなあ」という状況に陥った私は半年くらいフランス語の歌に向き合わないかもしれない。そうしてその夜は高揚した気分、久しぶりにフランス語の「リラの切符切り」「パリ・カナユ」「アムネ モア」を口ずさんだ。

このようにシャンソン・フランセーズとの縁は、おそらくそのグループとの縁だろう。流行や商業抜きの、比較的マイナーな歌そのものを何年も愛して止まないその人たちの情熱と人柄が、私をそのフランスの歌の魅力へ誘うのだらう。彼らは結婚式の誓いではないが「病める時も富む時もいつでもシャンソン・フランセーズ」浮気はしない。そして本当にその歌に近づきたいと根源の努力をする。歌が少し上達したからといって態度が変わらない。揺らがない。それが見えるから心地よい。例えばだんだん他人に歌が気に入られるようになると、歌がつまらなくなる人がいる。せっかく魅力があったのに、その魅力が見えなくなってしまう人がいる。それは本人の中から純粋な愛が消えてしまったのではないかと思う。その人は自分の歌に入り込み、相手に伝えることを忘れている。「伝える」「受け取る」そこに自分と他人の縁ができる。だから良い意味で「オタク」的情熱の楽しい風が相手を巻き込む。それを心地よいと思うところに縁が生まれる。

このように考えると、縁とはコミュニケーションである。それは必ずしも人間同士とは限らない。動物でも植物でも、文字であっても、感性で交信できるものは縁だ。そして縁とは努力でつなげるものではない。自然とつながるものだ。もちろん最初のきっかけは積極的行動であったとしても、自分にそぐわないものは遅かれ早かれ必ず離れる。だから離れるものに未練を残すのは無駄というもの。「忘れていると呼び戻される」のは歌が彼らをメッセンジャーとして私に話しかける縁だと思う。(2012.8.13)